

フツ化ピリミジン系代謝拮抗薬を用いた外来がん化学療法における治療継続状況

田村 真哉¹⁾、津村 直孝²⁾、正野 隆³⁾、松野 紀世彦⁴⁾、永野 悠馬⁵⁾、前田 守⁵⁾、
長谷川 佳孝⁵⁾、月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

1)(株)アイン信州 飯山土屋薬局

2)(株)アイン信州 茅野土屋薬局

3)(株)アイン信州 若里土屋薬局

4)(株)アイン信州

5)(株)アインホールディングス

【目的】フツ化ピリミジン系代謝拮抗薬(以下、5-FU 系抗がん剤とする)は種々のがん種の治療に用いられるが、十分な効果を得るためには服薬アドヒアランスの維持が重要である。そこで本研究では、5-FU 系抗がん剤を用いた外来がん化学療法の継続状況を調査し、薬局薬剤師の果たすべき役割を検討した。

【方法】2017 年 4 月から 2020 年 10 月に当グループ保険薬局 598 店舗が応需した処方箋 47,309,052 枚を対象に、抗がん剤および 5-FU 系抗がん剤の処方状況を調査した。また、5-FU 系抗がん剤の例として S-1、カペシタビン、UFT の服用継続日数をカプランマイヤー法で解析を行った(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0093)。

【結果】全応需処方箋における抗がん剤を含む処方箋の割合(以下、抗がん剤応需率とする)、および抗がん剤を含む処方箋における 5-FU 系抗がん剤を含む処方箋の割合(以下、5-FU 系抗がん剤応需率とする)は、2017 年 4 月でそれぞれ 1.21%と 24.5%、2020 年 10 月でそれぞれ 1.38%と 20.8%であった。また、服用期間の中央値、および 95%CI は、S-1(n=5,393):154 日[154-154]、カペシタビン(n=3,274):153 日[147-154]、UFT(n=1,906):196 日[189-203]であった。

【考察】調査期間において、抗がん剤応需率は増加傾向であり、5-FU 系抗がん剤応需率は減少傾向であった。しかし、調査終了時でも抗がん剤処方の 5 件に 1 件は 5-FU 系抗がん剤の処方であり、薬局薬剤師の 5-FU 系抗がん剤処方に対面する頻度が多いことが示された。また、今回調査した服用期間中央値は、最長の UFT においても約 6 カ月であり、副作用等が原因で早期離脱している可能性も示唆された。したがって、薬局薬剤師は 5-FU 系抗がん剤の服用患者に対しては処方開始初期から副作用等の発生状況を詳細に確認し、服薬アドヒアランスの維持や患者 QOL の向上にむけて支持療法の提案等の積極的な介入が必要であると考えられる。

(第 31 回医療薬学会年会(2021 年 10 月, Web)にて発表, 一部要約)